



目次

貴重書紹介 『五海道中細見記』	.....	p. 1
八百屋お七と米饅頭 鶴見菓子組合理事長 田村 ひろじ	.....	p. 2-3
図書館からのお知らせ	.....	p. 4

『五海道中細見記』

和菓子屋のご主人が昔の旅と鶴見名物について書いてくださったので、江戸時代の旅行案内をひとつお目にかけてたい。絵図の豊富に入った楽しいハンドブックである。

縦8.2、横18.3糎の美濃判三ツ切り横本。縹色地に卍繋ぎの空押し文様表紙は原装のまま刊行当時の気分を伝えるが、惜しいことに題簽を欠く。見返し部分に凡例、宿泊施設を商人宿・「とまり休」など4種類に細分して掲げるところに特色がある。

巻頭に「江戸講元発起人/大城屋良助」の附言・目録各1丁、東海道・「いせより参宮道」と続き「信州いなかい道」に至る42丁、次が中山道・「奥州道中筋」以下「出羽由利郡秋田領」の60丁、合計104丁。別に刊記1丁、「安政五年(1858)戊午初冬新刻」の次に「諸国発弘書林」として奥州仙台伊勢屋半右エ門から日本橋通須原屋茂兵衛まで23軒の書肆を挙げる。本文匡郭4周単辺(縦6.8、横15.8糎)、版心「東海道武州(丁付)」。



五海(街)道を網羅し脇往還にも目配りして絵図を載せ、各国領主・旅程・名刹古社等を明示するのは当然だが、凡例とも対応して旅籠名に詳しい。編者は附言に見える大城屋良助、伝不詳。『東講商人鑑』(安政2)の著あるを知るのみ。附言によれば「国々をわうらいして数多の年月をかさねしより旅行の苦患なる事粗其情を得た」編者は、宿の適切な選択こそ重要であると考え、この書物を世に送った。「当講中定宿定休所之儀者実意之御世話」云々としっかり宣伝もしているので、宿屋組合の江戸支部代表と言うところであろうか。

さて、わが「つるみ」(第2丁オモテ)を検するとそこに旅籠はなく、かわりに「よねまんぢう」と記されていて、音に聞こえた名物ぶりが伺えるのである(図版をご覧下さい)。近所には「市場 名物なし多し」「なま麦 立ば」も見え、150年ほど以前の旅行ガイドと比べながら、街道筋を歩いてみるのもまた一興。

## 八百屋お七と米饅頭

鶴見菓子組合理事長 田村 ひろじ

大本山総持寺の門前、JRと京急の踏切を渡るとすぐ前に旧東海道が直角に交差している。「お江戸日本橋七ツ立ち」で始まる東海道道中唄の「六郷渡りて川崎の万年屋、鶴と亀との米饅頭」の万年屋は川崎の奈良茶飯屋で、米饅頭は鶴見の市場村に多かった。

蜀山人大田南畝によれば定店は七軒とある<sup>注1</sup>が、鶴見村側にも二軒あったので、十軒ほどだったのだろう。享和三年（1803）の市場村名細帳に「米饅頭四十軒御座候」とあるのは、季節的な茶店、立売り、下請けなどを含めたものか、南畝の訪れたのは一月末だから閑散期であったことはたしかである。

江戸期には今日と同じ旅ブームもあったらしい。旅となれば食。「名物を食ふが無筆の道中記」（柳樽拾遺2・1796）の庶民にとって「初旅の先鶴見から喰はじめ」（武玉川12・1758）と東海道名物の第一号となるから驚き。「もち屋から出て酒のみを待ち合せ」（柳樽9・1774）や「まんぢうは鶴で茶飯は亀で喰ひ」（柳樽27・1798）など、上戸は川崎の茶飯で酒を飲み、下戸は先に一里歩いて鶴見で米饅頭を食べて待っているという図。因みに俳諧では江戸座の岡田米仲の「鬼百合によねまんぢうの行儀哉」（享保20・1735）が早いから、八代将軍吉宗の頃には米饅頭は鶴見と江戸では知られていたことになる。

「新編武蔵風土記稿」<sup>注2</sup>によれば鶴見の米饅頭は「うずら焼の形のごとくにして小なり。往来の旅人これを籠に入れて苞とす。」とある。うずら焼は塩餡を餅で薄目に包んだ大福餅のようなもの。焼鍋の上で焦目をつけて売る。当時は豆などの雑穀よりも餅の方が高価であった。鶴見では「よねまんぢゅ初手一口は餡がなし」（川傍柳初・1780）と餅が厚かったので腹持ちも良かった。値段も一個三文と、うどん、そば、汁粉の十六文と比べても安い。また風土記稿の通り土産としても利用された。竹籠が二文。江戸へ帰る最後の土産調達地で、特に夏の大山詣が最盛期であった。旅人が食べるだけでは量も知れたもの。籠に入れて土産とすれば売上もふえる。

米饅頭は本来江戸前期の名物菓子の一つである。振袖火事（1657）以降に浅草金籠山に店を構えた鶴屋、麓屋などで天和、元祿（1681-1703）に最も繁昌する。西鶴の「好色五人女」巻四（貞享3・1686）の八百屋お七が口封じのために小坊主に与えた品が「錢八十文と松葉屋のカルタ、浅草の米まんぢゅう五つ」であった。その後失速し市中よりも両国や街道筋などで売られるようになり、江戸も後期になると忘れられて「本朝世事談綺」や「用捨箱」の記事なども正確ではない。

しかし道中唄で歌われるほど盛っていた米饅頭も明治五年の鉄道開通と共に激変し、一年足らずで廃業、残った一軒の亀屋も明治末には店を閉じたといわれる。このことは鶴見の米饅頭が現在のドライブインなどと同じく街道往来の人を相手のガソリンと土産物店的な性格を持っていたといえるだろう。

総持寺の門前から踏切を渡って旧東海道までの広い道路は総持寺移転に伴って計画された門前町らしい。当時はJRも線路が二本あるだけだったので、故老の話によると両側合せて四十軒ほどの店が並んでいたと言う。寺に近い辺りに畑よねまんじゅうの店が二軒、踏切渡って寺に最も近く亀屋があった。戦後廃止された京急の本山前駅のホームで「つるみ名物よねまんちゅう 本元かめや」と書いた紙を掲げた亀屋の主人らしき人の写真も残っている。

しかし大正九年鶴見駅西口が開業して直接総持寺へ行く道が出来ると、門前の商店街も影響を受ける。大正十年の鶴見の子饅頭、前年の甲子饅頭などの出店もあった。大田南畝は米饅頭を古雅なるものと評したが、塩餡は小豆に塩を加えるだけで甘味もなく保存性にも欠ける。砂糖を使った小麦饅頭には分が悪い。しかし今日でも塩餡の米饅頭は埼玉県の中山道には数店あり、羽生市では同種の餅が塩餡餅の名で売られていた。餅に餡の塩味がきいて古雅なファーストフード感覚である。

(和菓子『清月』主人)



編集部注

注1 「大田南畝全集」第9巻（岩波書店 1987）『玉川砂利』p. 294-295 請求番号911. 19/0

注2 「新編武蔵風土記稿」第3巻（雄山閣 1957）巻71 橘樹郡14 p. 313

請求番号291. 08/D

## 図書館からのお知らせ

### ●ノートパソコンの貸出が好評

2005年1月から新たなサービスとして開始した、ノートパソコンとインターネット接続機器の貸出は学生の皆さんに好評です。インターネットに接続しながら、フロッピーディスクなどに入れて持ってきたレポートや課題を仕上げ、印刷するという利用方法が一般的なようです。

前期試験の7月は、4台の貸出用のノートパソコンがすべて出払ってしまう場面も何度かありました。件数的にはセミナー室の利用を上回っています。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
ノートパソコン貸出件数	53	91	146	155	19	106
インターネット接続機器貸出件数	20	38	19	32	1	9
合計件数	73	129	165	187	20	115
参考：セミナー室利用件数	50	65	104	114	38	104
参考：セミナー室利用人数	182	252	391	377	122	341

### ●第107回貴重書展「英国の本の世界 - ホーンブックからペーパーバックまで-」

図書館所蔵の珍しい本を紹介しながら印刷技術と読書の歴史をたどります。

期間：平成17年10月12日(水)～10月30日(日)

休日は閉館します。ただし、紫雲祭期間中(10月29日(土)・30日(日))は開館します。

時間：平日 9:00-20:00 土曜日 9:00-16:00 紫雲祭期間中9:00-18:00

場所：鶴見大学図書館1階エントランスホール

※どなたでもご自由にご覧になれます。料金は無料です。



アゴラー鶴見大学図書館報一 第119号 2005年10月15日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>